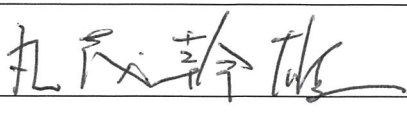

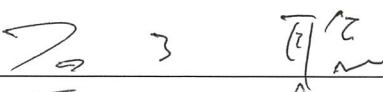

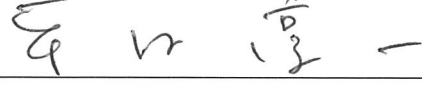



論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	松谷 雅子
論文担当者	主 査  
	副 査  
	副 査  
学位論文名	Epidemiological survey of tick bites in a dermatology clinic in Shimada city,
	Shizuoka prefecture from 2016 through 2023
	(2016 年から 2023 年までの静岡県島田市の一皮膚科医院におけるマダニ刺症
	に関する疫学調査)
論文審査の結果の要旨	
<p>【目的】吸血性節足動物であるマダニは、様々な動物種を宿主とし、保有している病原体を宿主から次の宿主へ伝播するベクターとして宿主動物に健康リスクをもたらすことがある。我が国におけるヒトのマダニ刺症においては重症熱性血小板減少症候群（SFTS）や日本紅斑熱、ライム病などがマダニ媒介性感染症として臨床上問題となり得るため、実態の把握を目的に調査を行った。</p> <p>【方法】2016 年～2023 年に静岡県内の 1 つの皮膚科医院を受診したマダニ刺症の 754 例（男性 346 例、女性 408 例）について、年齢、月別患者数、原因マダニ種、刺咬部位、刺咬部の紅斑、マダニの除去方法、抗菌薬投与の有無などについて検討した。</p> <p>【結果】年齢は 70 歳代が最多（240 例）、月別では 5 月が最多（226 例）で、茶摘み作業との関連が示唆された。種類別ではタカサゴキララマダニ（AT）による刺症が 717 例と最多で、次いでフタトゲチマダニが 28 例だった。AT 刺症では下半身の刺咬が 483 例（67.4%）で、好発部位と考えられた。AT 刺症のうち 150 例（20.9%）において刺咬部に直径 5cm 以上の紅斑を認め、tick-associated rash illness（TARI）と考えられた。AT 刺症において、マダニの口器を残さず完全に摘出する除去成功率について検討したところ、マダニ除去器具を使用した群では、指やピンセットで除去した群よりも成功率が有意に高かった。また、全症例のうち 336 例（44.6%）で抗菌薬が投与されていたが、その投与の有無に関わらずマダニ媒介性感染症の発症例はなかった。</p> <p>【考察】TARI 症例ではマダニ刺症の既往歴を有する患者が多く、TARI がマダニ由来の唾液腺物質に対するアレルギー反応に起因する可能性が示唆された。マダニ唾液腺中には糖鎖抗原の galactose-<math>\alpha</math>-1,3-galactose（<math>\alpha</math>-Gal）が含まれており、それを抗原として即時型アレルギー反応（<math>\alpha</math>-Gal syndrome）を生じることが知られているが、<math>\alpha</math>-Gal は ABO 式血液型の B 抗原との類似性があることから、A 型ないしは O 型のヒトでは <math>\alpha</math>-Gal syndrome を生じ易いとされている。今回、AT 症例と TARI 症例において血液型の比率には有意差を認めず、TARI を生じる抗原性物質は <math>\alpha</math>-Gal とは異なる物質である可能性が示された。マダニ除去器具での成功率が高かったことより、マダニ刺症では除去器具の使用が有用と考えられた。また、抗菌薬投与の有無でマダニ媒介性感染症の発症例に差は無く、マダニ刺症に対する抗菌薬投与はこれらの感染症の予防的観点からは推奨されないことが示された。</p> <p>本研究は当該分野の臨床上遭遇する問題点の検討に有意義な研究であり、学位に値すると評価した。</p>	